

助動詞「けむ」確認テスト（過去推量） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 連体形。文中に疑問の係助詞「か」（いかなる人か）があり、その結びとして文末が連体形「けむ」になっています（係り結びの法則。疑問・反語の「か」は連体形で結ぶ）。意味は「どのような人が、ここに住んでいたのだろうか」。

問2 ア（過去推量）。「(その人は昔) うれしいと思っただろうよ」と、過去のことを推し量っています。

問3 イ（過去の原因推量）。手がかりの語は「など（=どうして）」。「どうしてつらい目を見せたのだろうか」と、過去の理由を推し量る意味になります。

問4 ウ（過去の伝聞・婉曲）。手がかりは「と語り伝へたり（=と語り伝えている）」。

人づてに聞いた話なので、「昔、男がいたとかいう」という伝聞の意味になります。

問5 「どれほど恋しく思っただろう。」過去推量なので「～ただろう」と訳します。

問6 過去の原因推量。「いかなる契りにて（=どんな前世の約束で）」と理由・事情を問う表現を伴い、「どんな前世の縁で、こんな人を見た（妻とした）のだろうか」と過去の理由を推し量っているためです。

問7 已然形。前に係助詞「こそ」があるため、結びが已然形「けめ」になっています（係り結びの法則）。意味は「そのようにお思いになっただろう」。

問8 「どれほど泣いただろう。」過去推量「～ただろう」で訳します。

問9 「家を恋しく思っただとかいう（思っただろう）人々」。「思ひけむ」は下に体言「人々」が続く連体形で、人々を修飾しています。

問10 「どうして、このようにおっしゃったのだろうか。」「など（=どうして）」があるので過去の原因推量で訳します。

問11 ①過去推量（～ただろう） ①過去の原因推量（どうして～ただろう） ②過去の伝聞・婉曲（～たとかいう／～たような）。この三つはセットで覚えましょう。

問12 「けむ」は連用形に接続します。これと対になる「らむ」は終止形に接続します（ラ変型には連体形接続）。接続の違いは見分けの大きな手がかりです。

問13 四段（型）活用です。終止形・連体形はどちらも「けむ」、已然形は「けめ」。未然形・連用形はなく、ふつう終止形「けむ」・連体形「けむ」・已然形「けめ」の三つを覚えておけば足ります。

問14 「けむ」は過去のことを推量し、「らむ」は現在（今ごろ）のことを推量します。たとえば「降りけむ」は「(昔) 降っただろう」、「降るらむ」は「(今ごろ) 降っているだろう」となります。

問15 (例)「らむ」は終止形に接続して現在の事柄を推量し（今ごろ～ているだろう）、「けむ」は連用形に接続して過去の事柄を推量する（～ただろう）点で使い分ける。接続と時制の両方が異なります。

問16 ア・ウ。アは「思ひ+けむ」、ウは「おぼえ+けむ」で過去推量。イ「行く+らむ」、エ「ぬ+らむ」は現在推量の「らむ」です。

問17 「けむ」であるものはウ（泣き+けむ）。アの「らし」は推定の助動詞「らし」（来たる+らし）、イの「む」は推量・意志の助動詞「む」（言問は+む）で、いずれも「けむ」ではありません。語の切れ目で見分けます。

問18 「けむ」はそれ全体で一語の助動詞だからです。「き」+「む」という二語の組み合わせではなく、連用形に接続する一語の過去推量の助動詞として扱います（「き」は未然形「せ」・連用形「し」など特殊な活用で、そもそも「けむ」の一部ではありません）。

問19 (1)「しけむ」＝「(昨日は) 何をしたらろう」。 (2)「すらむ」＝「(今日は) 何をしているのだらう」。「けむ」は過去、「らむ」は現在を推量している点を対比して訳し分けます。

問20 連体形「けむ」の下には体言（名詞）が続くことが多いです。本文の例＝⑨「思ひけむ人々」のように、下の名詞を修飾します（＝思っただらう人々／思っただかいう人々）。

問21 「など」「いかに」「いかなる」など、疑問・理由を表す語を伴うことが多いです。本文の例＝③「など…見せけむ」、⑩「など…仰せられけむ」。

問22 けむ。「き」は過去（～た）、「けり」は過去・詠嘆（～た／～たことだ）で推量の意味は持ちませんが、「けむ」は過去推量などの推量の意味をあわせ持ちます。
